決して滅びないもの　　マルコ 13:28～31

本日のマルコ 13 章 28 節に「いちじくの木から、たとえを学びなさい。」という主イエス・キリストのお言葉が記されています。いちじくの木は、主イエスがおられたユダヤ地域ではごくありふれた、どこにでもある木でした。主イエスはそういう身近な木を用いて教えを語られたのです。日本では身近な木と言えば、時期的にはそろそろ桜でしょうか。いちじくの木と言われてもピンときませんが桜の木と言われればすぐにいろんな光景が浮かんできます。

ただ聖書に出てくるいちじくの木と桜の木は種類が違うということだけではなく別の木に対する印象の違いがあります。それは、大きく言えば世界観、歴史観の違いといったものです。例えば私たちが桜の木を見る時に感じるのは四季折々の風情というものではないでしょうか。桜を見ると春、入学式や入社式をもって新年度の始まりという毎年繰り返される自然の営みのリズムを感じます。一年なら一年というひとめぐりの環の上を繰り返しぐるぐる回っている、そのリズム、四季の移ろいを感じているのです。そこには終わりはありません。毎年四季は繰り返されていき、いつまでも続いていくのです。それに対して主イエスが「葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。」と言っておられるのは、今はこうなっている、だからこの先はこうなっていく、というふうに物事の変化の先を見つめる感覚です。それは直線的な感覚です。年表のように歴史的感覚と言うこともできます。「今年もまた桜の季節がやってきました」と言う感覚は歴史ではなく自然を見つめる感覚です。そのことが悪いわけではありません。自然における四季の移り変わり、そこにおける花鳥風月の風情を楽しむにはそれが適していると思います。そこでは、桜の花が咲けば花見を楽しみ、その散る様に儚さを覚え、散ったらまた来年の花見を楽しみにしましょうと言うわけです。しかし私たちの人生は花見をして良かった良かったでは終わりません。これからどういう人生を歩んでゆこうか、そのために自分は今、何をなすべきかを考えます。主イエスがいちじくの木から学べと言っておられるのは、そういう歴史的感覚なのです。しかもそれは、私たちがよく耳にしているような、これから世界経済はどうなっていくかとか、少子高齢化が社会にどのような影響を及ぼしていくか、気候変動によって地球はどうなっていくか、などといった、目先の歴史を見つめる感覚ではありません。勿論それぞれに非常に大切なまた深刻な問題です。しかし主イエスはもっと根本的な、この世の終わりをも視野に入れた歴史的感覚を持つようにと言っておられるのです。26 節に「そのとき、人々は、人の子が偉大な力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。」とあります。いちじくの葉から夏の接近を知るように、「これらのこと」を見たら「人の子が戸口まで近づいている」ことを悟りなさいと言われています。「人の子が」という言葉は原文にはありません。29 節に「そのように、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。」と語られていたこととのつながりで、戸口に近づいているのは「人の子」だということが分かるのです。そしてそれは、主イエスがもう一度この世に来られ、それによってこの世が終わる時が近づいているということを意味しています。つまり主イエスの再臨によるこの世の終わりを視野に入れた歴史的感覚を持て、と主イエスは言っておられるのです。

さて「これらのことが起こるのを見たら」の「これらのこと」とは何でしょうか。私たちはそれをこの 13 章の前半に見ることが出来ます。それは、戦争や戦争のうわさ、民族と民族、国と国の敵対、地震やききんなどの天変地異、また信仰のゆえの迫害、あるいはにせ預言者やにせキリストの出現といった、様々な苦しみのことでした。人の子がもう一度来られる前には、そのような苦しみが起るのです。それが次第に頂点に達していき、天地創造の初めから今までになく、今後も決してないほどの苦難が襲って来

るのです。しかしそれは、いちじくの葉が伸びて夏の近いことが分かるのと同じように、人の子が戸口に近づいている、つまり主イエスがもう一度来られることによってこの世が終わろうとしている、そのことのしるしなのだと悟りなさい、と主イエスは言っておられるのです。

これらの苦しみは、将来それが襲って来たら、いよいよ世の終わりが近いことを知ることができる、というものではありません。この福音書が書かれ、読まれた時の教会の信者たちは、既にこれらの苦しみの中にいたのです。戦争や地震や飢饉、迫害、にせの救い主の出現などは全て、彼らにとって将来のことではなくて、今直面し体験していることでした。そしてそれは現代、私たちもまた、彼らとは違った仕方でやはり直面し、体験していることです。戦争や戦争のうわさは今でも私たちがメディアを通して知るところです。民族は民族に、国は国に敵対するような事態が私たちの周囲にも多々起こっています。新型コロナウイルスのことで悲しい差別的な表現を聞いたりします。先日もアメリカやヨーロッパでアジア系の人がひどいことを言われたり、されたりしているニュースが流れていました。大きな地震や津波によって ある日突然全てを失うということも起こっているし、信仰のゆえに迫害を受けることも、この社会において起こっています。 この福音書が書かれた当時の教会の人々も、また私たちも、「これらのこと」が起こるのを既に見ているのです。ですから「人の子が戸口に近づいている」ことを悟るべき時は、いつかではなくて今です。初代の信仰者たち以来、教会は常に、「人の子が戸口に近づいている」ことを、つまりこの世の終わりが既に始まっていることを意識しつつ歩んでいるのです。そのことを視野に入れて生きることが私たちにも求められているのです。

しかしそれは、あと何年で主イエスがもう一度来てこの世が終わるのか、ということをいつも考えながら生きるということではありません。教会の歴史の中には時折そういう間違いに陥った人々が現れました。何年何月何日にこの世が終わる、などと言い出す人が現れたのです。そのような思いに捕えられてしまった人は、本来神様から自分に与えられているはずの日常の生活に手がつかなくなってしまいます。そして例えば、一切を放棄してお祈りばかりしているようになったりするのです。祈ることは悪いことではありませんが、このような祈りは、神様から自分に本来与えられているこの世における 務めを放棄してしまうということにおいて、「もうじきこの世が終わるなら、今さら何をしても仕方がない、せいぜいやりたいことを好きなだけして楽しもう」という享楽的な生き方と本質的には変わりません。

それではどのように生きることが、世の終りを意識して生きることなのでしょうか。「たとえ明日この世が終わるとしても、私は今日リンゴの木の苗を植える」これは宗教改革者ルターが語った言葉とされています。ずい分ルターはりんごが好きだったんでしょうかね。それは冗談ですがこの言葉に現されている生き方、つまりこの世の終わりが始まっていることを正しく意識して生きる信仰者の生き方をこのことばは示しています。このルターの言葉には、この世の終わりを視野に入れた歴史的感覚が語られています。歴史的感覚を持つとは、過去を振り返ることによって今の時代の意味を捉え、将来への展望を持って、今自分がなすべきことを見定め、実行していくことです。

そのように生きることは、この世の終わり、終末を見つめる時だけのことではありません。私たちの人生の終わりである死を見つめる時にも同じことが起ります。死は、私たちの人生の終末であり、この世において自分が持っている全てのものを失う時であり、この世における自分の営みが無に帰することです。そういう死が自分にも必ず訪れますし、人生はその死に向かって確実に近づいているのです。死は私たちに「終わり」があることを意識させます。私たちの人生が、閉じられた円の上をぐるぐるといつまでも回っているのではなくて、始めがあり終わりがある直線なのだということを、死が教えているのです。こ

の世の終わりが、私たちの人生において先取りされるのが死であると言うことができます。

ただ、自分の死を正面から見つめる時、私たちはやはり空しさと不安の中で耐えられなくなり、死をできるだけ見ないように、それには触れないように蓋をして、ごまかして生きていかざるを得ないということになります。それが私たちの現実でしょう。「たとえ明日この世が終わるとしても、私は今日リンゴの木の苗を植える」と言ったあのルターの言葉は言い換えれば、明日死ぬことが確実に分かっているとしても、私は今日も自分のいつもの仕事をする」ということです。このように、終わりを、死を、正面から見つめつつ、それによって動じることなく、行きあたりばったりにならずに、今をしっかりと生きていくという生き方はどうしたら出来るようになるのでしょうか。

その秘密は、31 節にあります。「この天地は滅びます。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」。ここには、天地が滅びること、つまりこの世が終わり、人間の営みが全て無に帰することが直視されています。しかしそれと同時に、その終わりにおいても決して滅びることのないものがあることが宣言されているのです。その「滅びないもの」とは「わたしのことば」である主イエス・キリストの言葉、神様のみ言葉です。天地が滅びても、神の言葉だけは決して滅びない、その滅びないものを見つめる時に、そこに希望が与えられ、行き当たりばったりにならない生き方が与えられていく、主イエスはそのことを私たちに見つめさせようとしているのです。

イザヤ書 40 章 6〜8 節にもそのことが語られています。

「すべての人は草、その栄光は、みな野の花のようだ。

主のいぶきがその上に吹くと、草は枯れ、花はしぼむ。まことに、民は草だ。

草は枯れ、花はしぼむ。だが、私たちの神のことばは永遠に立つ。」

私たちは、主のいぶき、すなわち主が与えて下さったいのちを生き、草や花のように枯れ、しぼんでいきます。そのことが私たち一人一人の人生において起こるのが死であり、この世界全体に最終的に起こるのがこの世の終わりなのです。しかしその終わりの時を越えて、神の言葉はとこしえに立ち、決して滅びない。ルターは、その決して滅びることのない神の言葉を見つめていたのです。ですから、全てのものが滅びていくこの世の終わりを思い、また自らの人生の終わりである死をも見つめつつ、なお希望をもって「明日この世が終わるとしても、私は今日リンゴの木の苗を植える」と言うことができたのです。 それは何も使命感を感じ、やりがいを感じることをするということだけではありません。ある人にとっては家族のために食事を作ったり家の掃除をすることかもしれません。病気の方でしたら今日、病気が少しでも良くなるために治療を受けることかもしれません。大切なことはすべてを支配しておられる神を意識しながら日々のことに全力を尽くすということです。

ルターが見つめていた、決して滅びることのない神の言葉、それは主イエス・キリストによる救いを告げる言葉です。天地を造り、今も支配しておられる主なる神様が、その独り子イエス・キリストをこの世に遣わして下さり、その主イエスが私たちの全ての罪を背負って十字架にかかって死んで下さったのです。それによって神様は私たちの罪を赦して下さり、私たちを神の子として下さったのです。滅びることのない神の言葉は、この主イエス・キリストの十字架による救いをはっきりと私たちに告げています。

この神の言葉が、天地が滅びてもなお滅びることがないというのは本当でしょうか。天地が滅びて人間が皆死んでしまえば、どのような言葉も人間と共に滅びてしまうのではないか、意味をなさなくなるのではないか、と私たちは思います。しかしそうではないのです。そのことを告げているのが、主イエス・キリストの復活です。神の子主イエスは、私たちの罪の赦しのために十字架にかかって死んで下さった

だけではありません。その主イエスを、父なる神様が復活させて下さったのです。つまり主なる神様が死の力を打ち破って、主イエスに、新しい命、永遠の命を与えて下さったのです。それは、私たちにも同じ復活の命、永遠の命を与えて下さるためです。主イエスを復活させて下さったことによって神様は、私たちをも死の支配から解放し、永遠の命を与えて下さるという救いを約束して下さっているのです。神の言葉は、主イエス・キリストの十字架の死と復活によって実現した神様のこの救いの約束を告げ知らせています。ですから神の言葉は、私たちの死と共に滅びてしまうようなものではないし、この世の終わりに天地が滅びても、それと共に滅びてしまうことはないのです。神のことばが滅びないということは死が事実であることが認められるぐらいの確かさをもって復活が事実であることを示しています。私たちは今はもちろん死んでいません。しかし死を経験してはいないけれどもいつか死がやってくることを信じています。経験していない死を信じられるならばそれと同じぐらい信じられる度合いで復活は確かであるということです。それが神のことばが滅びることはないという意味です。

聖書を読んだからといって、これから先世界がどうなるかがよく分かるというわけではありません。この先何が起るかは誰にも分かりません。しかし私たちは、私たちのために十字架にかかって死んで下さり、救いを与えて下さった主イエスが、復活して今も生きておられ、この礼拝において私たちと出会い、共にいて下さることを知っています。

いにしえの人はメメント・モリ（死を忘るなかれ）と言って、自らが時至って死ぬべき存在であることを忘れないように言い聞かせました。しかし、キリスト者こそ死を忘るなかれ、神のことばが滅びないゆえにやがてその先には確かな復活の希望が約束されていると言うことができるのです。今日、あるいは今週、あなたは神の前にあってルターがりんごの苗を植えたように何をされるのでしょうか？